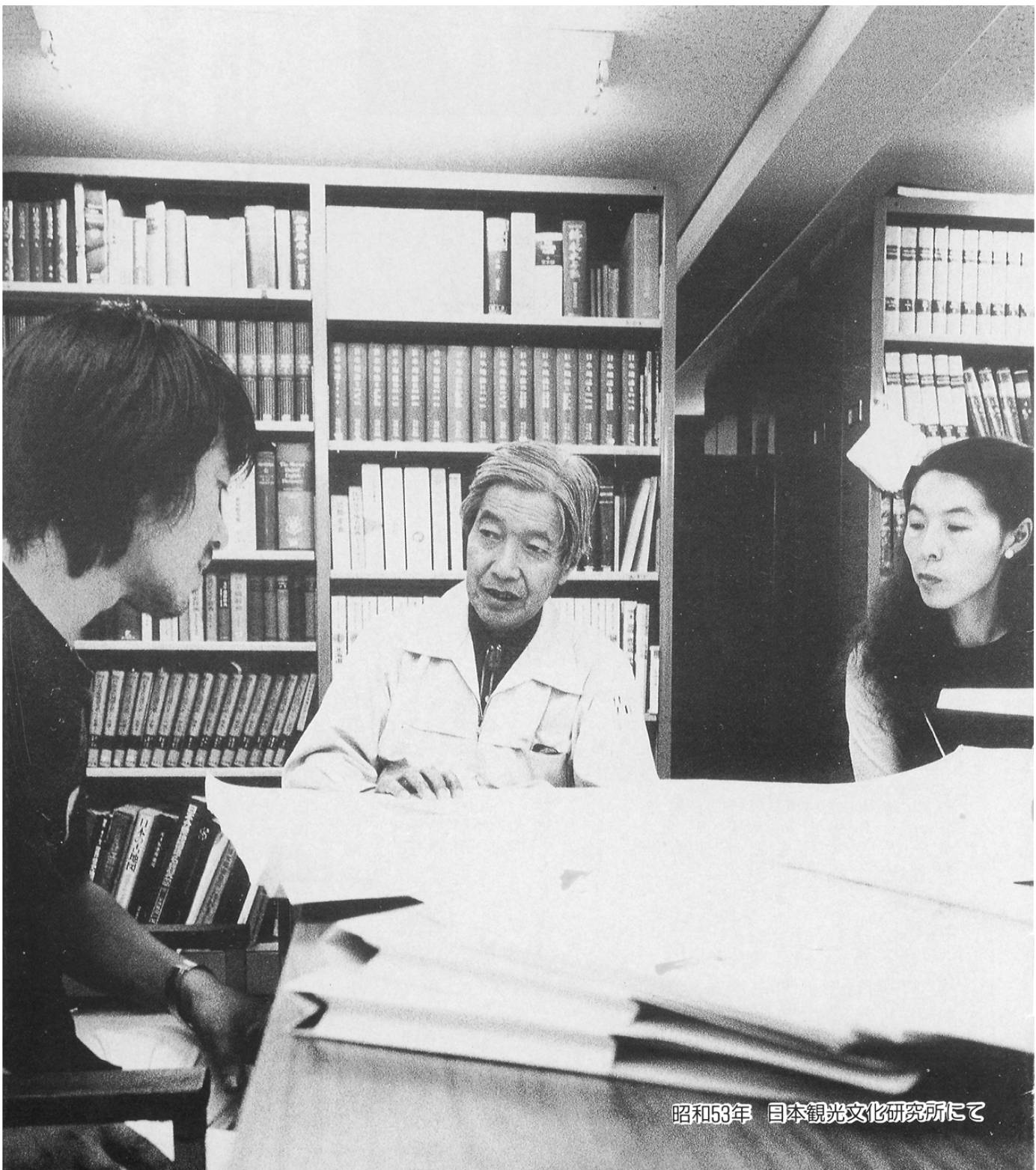


郷土

第 2 号

平成4年3月20日

編集・発行 / 宮本常一記念事業策定審議会
東 和 町 役 場



昭和53年 日本観光文化研究所にて

記念事業の

推進にあたり



宮本常一記念事業策定審議会会長
東和町長

西木 宏

会報「郷土」の発刊にあたり、
ご挨拶申し上げます。

前町長の柳居県議様がこの宮本
常一記念事業を起こされて今年で
五年目を迎えることになりましたが、
私は、昨年四月に柳居先生の後を
受け町長に就任し、この記念事業

も同様に受け継ぎまして今日に至
っております。何卒、よろしくご
鞭撻のほどお願い申し上げます。

町づくりのための

事業の展開

この事業はこの五年の間に数々
の実績をあげ、町づくりや地域の
活性化のために大きな貢献をされ
てまいっております。具体的な取
組みとしては、専門委員会や推進
委員会の皆様による町づくりなど
のためのご審議やご提言に合わせ、
座談会やシンポジウム、講演会等
の人づくり研修を行ってまいりま
した。

また、実務面では宮本先生に関
する資料や写真の収集、数千にも
及ぶ著書の収蔵等も行っております
が、今年は新たに町づくりの先
進地研修も盛りこまれ計画してお

ります。なお、今後におきまして
は、この記念事業のいま一つの道
である文化財や民俗資料の保存、
展示施設の建設計画にも取りかか
らなければならぬものと思ってい
ます。

先生の教えを学び

豊かな町づくりを

さらに、宮本先生は豊かな郷土
をつくるためには「われわれ自ら
が進むべき方向を考え、実践する
こと」と説いておられます。最近
よく取り上げられている「ふるさ
と創生」とまさにその考え方は軌
を一にするものであって、先生
は早くからこのことを唱えておら
れるのであります。先生の先見性
に改めて敬意を表するものであり
ます。

私どもは先生のこの教えを学び、
これからの豊かな町づくり、地域
づくりに活かしていかなければな
らないと思っております。皆様の
ご提言やご意見をお寄せくださる
ようお願い申し上げます。

私も豊かな郷土をつくるため、
懸命な努力をしてみたいと思っ
ております。皆様の一層のご指
導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

委員の紹介 (敬称略)

★会長

○東和町長

★顧問

○防衛大学教授

○生活学会理事長

○離島センター専務理事

○相模女子大学教授

○山口県議会議員

★専門部会

○部会長 東京農業大学教授

○離島センター調査研究部長

○武蔵野美術大学教授

○テム研究所長

○東京農業大学教授

★推進部会

○部会長 町議会議長

○町農協組合長

○町漁協組合長

○町商工会会長

○町婦人会会長

○町老人クラブ会長

○郷土大学事務局長

○町助役

○町経済観光課長

西木 宏

山階芳正

川添 登

児玉義幸

高松圭吉

柳居俊学

米安 晟

大見重雄

田村善次郎

真島俊一

舩重正一

新山玄雄

村田幸雄

風呂川盛勝

秋元敏雅

鎌田美代子

西村与一

中本健雄

中川英利

中村興家

宮本先生を

偲ぶ



推進部会長
新山 玄雄

「宮本常一先生を偲ぶ会」が今年の一月三十日に先生の墓所神宮寺で開かれました。今年で先生がお亡くなりになり十一年となりました。十年一昔。まさに日々の過ぎるのは早いものです。その会で郷土大学での先生の講演の様子をビデオを見、なつかしく、ひととき当時の思い出話に花が咲きました。郷土大学の開校記念事業講演の様子もビデオに収録してあり、当時の熱気が伝わってきます。話される先生も聞く我々も真剣です。このままでは東和町はどうなるのか、強い危機感がありました。ますます進む過疎・高齢化、その現状をどうにかしたい。もっと夢と希望をもてる町にしたいという若い情熱を、参集したすべての人が

もつていたと思います。

その情熱を今でももっているかの十一年の間、我々は何をしてきたのか。いろんなことに取組み、常に前へ前へと進んできたつもりが、実際はどうだったのか。いろんな問が頭をかすめます。町おこしは自分おこし、自分の成長は町の成長だと信じながら、がむしゃらに過ごしてきたつもりではありません。しかし、本当に町は良くなったのか……。そんな思いを残した「偲ぶ会」でした。

それにしても当時のみんなはなんと若い、フサフサした髪、今より引き締まった身体、みんな確実に年を重ねてきたことがよくわかります。そのビデオを見ながら当時のことを思い起こします。

“これから東和町の

維新がはじまる”

今でこそ町づくり、地域おこしふるさと創生と、いわば猫も杓子もいわゆる地域活性化をいっていただきますが、そのことを戦後の高度成長のまっ只中で問いかけ、山村、辺地に温かい眼差しを向けてこられたのが宮本先生だったと思います。各地で種をまき、多くの人材を育て、地域や時代、そして人間を問うこと、問い続けることを説いてきたのだと思います。そのい

わば最後の仕事「郷土大学」の開校だったと思うのです。

ご自分の死期を予知しておられたのか、開校式を経て一年たらずでお亡くなりになりました。しかし、そのおとされた種の価値、意義はなんと大きなものだったかと思ふのです。その開校式の前、先生宅で食事をごちそうになった時、おっしゃったのがこの言葉です。「郷土大学の開校によって東和町の維新がはじまる」——はたして維新となったのか。

“この橋全国同胞の協力に

よって出来ました”

感謝します”

昭和五十八年三月十八日、沖家室大橋完成。先生が離島振興の慈父といわれ、離島振興法制定の折尽力なされたことは多くの人の知るところです。わが町の沖家室大橋の完成も当時離島振興特別委員の先生の尽力がありました。架橋は島民の宿願でした。その願いを国土庁離島振興課にいつて話された時、かの国土庁の役人が「それでも先生この島は高齢化が進んで、このままではますます人口が減るでしょう。そんなところに橋を架ける意味がありますか」と難色を示したところ、先生は「わしがふやしてみせる」と一声発せられた

とのこと。これには私はかえす言葉がありませんでしたと、当時の国土庁のお役人本人から聞いたことです。

そして、架橋の完成の際、記念碑には政治家の顕彰碑などつくる必要はない。彼らはただ口をきいただけなのだから。それよりもお金を出してくれた全国の納税者に感謝する碑を作りなさい。公共事業で納税者に感謝する碑を作った例はほかにはありません。その碑には、「この橋全国同胞の協力によって出来ました。感謝します。沖家室島民」と書きなさい。そうすれば大変心あたったかい橋になります。とのことでした。

今、橋の袂には多くの人の浄財によって建てられた大理石の記念碑があります。その横には、先生の言葉がしっかりと石に刻まれています。もちろんこれは、政治に携わる方に世話になっていないというのではありません。同様に感謝しております。念のため。先生との思い出は他にもたくさんあります。その端々を紹介させていただきます。

記念事業も今年で五年目、まだまだこれからです。どうか皆様のご協力、心よりお願い申し上げます。次第です。

東和町と先生とのかわり

先生の経歴



藤井 正 (小積)

宮本常一さんと私

記憶力抜群の宮本常一さんと初めて出合ったのは、西方尋常高等小学校に入学したときであります。それから二年間机を並べて問答するなど仲の良い友達でありました。二年年の一学期、授業中に突然、先生が「宮本君は将来何になる心算か」と質問されたとき「私は文士になります」と即答。「藤井君は」「百姓になります」と。あれから七十年が経ちましたが、その時の事が今尚忘れられません。その後間もなく担任の先生は御

病気で退職したが、卒業まで後任が無く、教室で独学という、不運の学校生活を過ごしました。

友人が進学する中、農家の長男である宮本君と私は、共に許しが無く、中学講義録をとり、農業を手伝いながら独学しようと決心しました。元来、頭の良い宮本さんは、農業を手伝う傍ら勉学に励んでいたようでしたが、養蚕で忙しい時には勉強どころか寝る暇も無い程つらい体験をしたようです。

大学に大望を抱く以上、こうした生活が永続するはずがなく、宮本さんは遂に大阪へ出たのでした。以後二人の音信も断絶したが、ある日病魔に倒れたと知らされ、驚き、早い全快をお祈りしました。

『男子志をたて郷関を出ず、学若し成らずんば、死すとも還らず』宮本さんはこの詞を胸中に、刻み込んでいたような気がします。

健康も回復し上京してからは、民俗学者としては右に出る人が無いほどに東奔西走して研究を重ね、

文学博士の榮譽を得られたことは、郷土の大きな誇りであります。

古里に帰ったなら、東和町のため余生を捧げるご決心であったようです。郷土大学の設立もその為だったのでしょうか。

農村問題に関しては、率直に柳居前町長に進言したほか、理解と協力をお願いしたい旨、私に話されたこともありま。しかし、柳居町政の素晴らしい実績を見届けることなく、また、昨秋の台風で苦慮している東和町に、一番求められているはずの宮本さんの進言を賜ることができないのは、天命ではあるが、甚だ残念であります。大学を卒業されたご子息の光さんが、みかん不況の最中、みかん栽培に着手されたことは、多くの人が注目したようです。

その後、驚くほどの規模拡大、優良系統への切り替え、優良品種を入手して試作するほか、産地直送、観光農業等、光さんならではの幅広い構想で農業に取り組んで

宮本常一先生は、日本を代表する民俗学者で、全国の離島・農山漁村をくまなく歩かれ、その調査研究をもとにした学術発表のみにとどまらず、農山漁村を広く紹介することに努められ、日本の離島・過疎地域の振興対策貴案づくりに貢献された方です。その先生の経歴を紹介します。

- M40・8・1 東和町長崎で出生
- S4・3 大阪府天王寺師範学校卒業
- S14・10 アチックミュージアム研究所員(後の日本常民文化研究所 S56・1まで)
- S24・4 日本民俗学会評議員(S56・1まで)
- 同12 水産庁水産資料整備委員(S27・12まで)
- S25・1 日本民俗学協会評議員(後の日本民俗学会 S56・1まで)



▲品種改良を重ねた現在のみかん

ミカンと東和町 戦後復興の要

戦後、農村の復興のため、ミカン産業がどのように普及されたか宮本先生研究のもとに編纂された、東和町誌をもとに探訪してみます。「東和町誌」みかん王国より
戦後、農村を復活させるには、ミカン植栽が最も適しており、そのため借入金の子補給制度の確立と早急な基盤整備が必要であつ

おられるのに感心しております。ある日私を訪ね「父を知る各方面の方にみかんを送るとき、キヨミ（晩柑）を少し混ぜると喜ばれます。是非増殖したいので穂木を分けてください」ということもありました。

しかし、昨秋の台風でみんな枯

れ、甘いキヨミの味を楽しむことができなくなりました。万一、このような被害があつたとすると、宮本常一さんとお客さんとの心のつながりを、光さんはどのように対応されるのか、宮本農園に台風の大被害がなきように祈っております。

た。とある。

当時イモ・麦の小さな畑を広い畑に造成し合理的なミカン栽培をするには、ほとんど普及がなかったブルドーザを利用する必要があつた。初めてブルドーザが使われたのは、昭和三十三年十一月であつた。しかし、奥地の未墾の山地へブルドーザが入れる農道はほとんどなく、農道整備の問題は大きく取り扱われないまま、イモ・麦の畑、そして、水田へと植栽は急速に進んでいったのであつた。戦後の農村の復興には、ミカン栽培を普及することだと、皆、漠然と考えるようになったが、昭和二十五年当時、ミカンの植栽は、まだ、全町の耕地面積九百町歩のうち二百町歩程度であつた。昭和二十五年ごろ、稲作の反収二万六千円に対し、ミカンは反収十万円と四倍もの収入があつた。

ミカンこそ、農民が生産するのに最も有利であり、最も希望が持たれ、ミカン植栽面積の拡大は急務であつた。しかし、東和町では経営面積が零細で、ミカン栽培で生計をたてうる経営面積五反以上の農家は二割程度に過ぎなかった。

一方、安下庄に山口県農事試験場、柑橘分場を開設。柑橘栽培の指導が行われ、青年層が中心になつて柑橘研究同志会が結成されたが、東和町では、昭和三十三年になつても植栽面積は、まだ、二百九十町歩に過ぎなかったのである。

昭和三十五年からの植栽は目覚ましく、昭和四十五年には八百二十五町歩、五十年には九百十七町歩にものぼつたが、スタートの遅れと転換に二十年を要した結果、結局、昭和四十五年ごろから生産過剰に陥り、インフレの進む中で、ミカンだけは価値が下落して後継者が減少。人口は減り続けたのである。

今後、町の発展を考えるとき、戦後の町の復興に全勢力を注がれた先人の努力と勇気を認識し、現代と将来の波を的確に捕らえながら、町民の総意のもと、町の方向性を見出してその波を乗り越え、「発展」に結び付けなければならぬのではないでしようか。

- S 28・10 全国離島振興協議会幹事長（S 29・5まで）
- S 29・5 同協議会事務局長（S 33・3まで）
- S 32・11 文化財保護委員会調査員（S 33・3まで）
- S 33・3 離島振興協議会顧問（S 56・1まで）
- S 36 著書「日本の離島」でエッセイスト・クラブ賞
- S 36 著書「日本の風土記」で中国文化賞受賞
- S 36・12 文学博士の学位授与（東洋大学）
- S 41・4 武蔵野美術大学専任教授（S 52・3まで）
- S 45・9 離島振興審議会委員（S 54・6まで）
- S 46・10 県文化財保護専門委員（S 56・1まで）
- S 47・4 岡山大学法文学部講師
- S 50・11 日本民具学会設立、同幹事（S 56・1まで）
- S 52・3 武蔵野美術大学名誉教授（S 56・1まで）
- S 52・3 東和町文化財保護審議会委員（S 56・1まで）
- S 54・6 国土審議会離島振興対策特別委員（S 56・1まで）
- S 56・1・30 ご逝去

先生が亡くなられて早十一年

宮本常一先生は、昭和五十六年一月三十日この世を去られ、今年でもう十一年が経過しました。

来年は、十三回忌を迎えることとなりますが、東和町郷土大学(中

で町づくりを誓う 常一先生を偲ぶ会」



▲開会であいさつする
中本郷土大学事務局長

本健雄事務局長)では、先生の命日に何かできないものかということで、一月三十日、「宮本常一先生を偲ぶ会」を開催しました。

場所は、「先生の霊が安置されている西方の神宮寺がよいのでは」との提案により、前町長の柳居俊学山口県議氏に場所提供のお願いをしてお引受けいただきました。

先生を偲ぶ会は、現在、東京でも毎年催されていることです。

当日、午後六時、参加者は宮本先生の墓前に線香と花を捧げ、今は亡き先生の魂に、生前、先生に貴重な思い出と町づくりの理念を授けていただいた感謝を胸にお墓参りした後、偲ぶ会を開会しました。

開会に際し、主催者の郷土大学



▲先生の墓前に花と水を捧げる

中本健雄事務局長が「東京でも、毎年偲ぶ会が開催されています。先生の出身地でもあり、私たちがいちばんお世話になった東和町で、かねてから偲ぶ会を開催したいと思っていました。



▲先生の記念の写真集を見ながら思い出にふける出席者

これからも、その時の先生の教えをいろいろと掘り起こして、東和町が良くなるよう努力してまいります」と、あいさつされた後宮本常一記念事業推進部会長の新山玄雄議長は、「先生の理念を継いで各種の事業を推進してまいりたいと思います。いろいろな地域の問題はあれども、その問題を内から見つめることが無くなったら本当に寂しいことだ。道は果てしなく遠いと思う」という先生の言葉を胸に秘め、一歩一歩踏みしめながら、道を歩いていきたいと思えます」とあいさつされました。

続いて、場所をご提供していただいた柳居俊学山口県議が、「民



▲町長時代を振り返りながら
思い出を述べる柳居県議

宮本先生を偲ん

郷土大学「宮本

具を収集していたころの先生との思い出。町長時代に東和町誌の編集や皆さんと一緒にいろいろな事業に取り組んでいたことを思い出します。今後も先生の理念を継承しながら、これからの時代にあつた町づくりの展開を繰り広げてまいりたいと思います」と先生との思い出や先生の理念を継承しながら歩んできた十年間を思い浮かべつつ、切々とあいさつをされました。

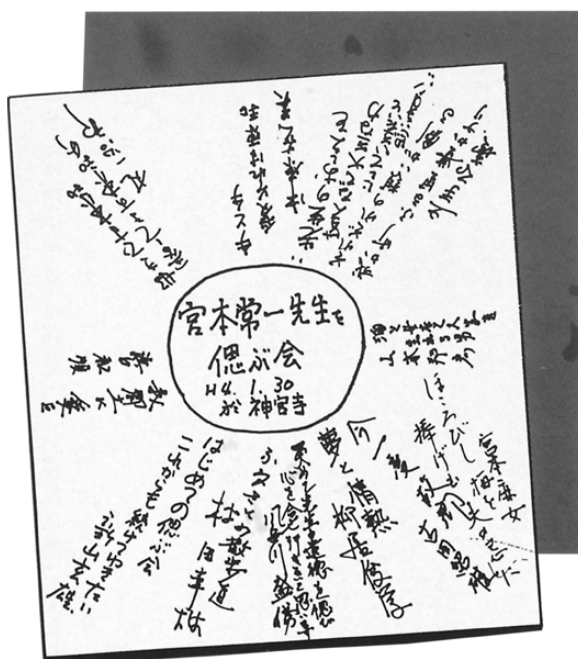


▲宮本先生を偲びながらあいさつする新山推進部会会長

宮本家からは、先生の奥さんのアサ子さんとご子息の光さんにご出席いただきました。
先生を偲ぶ会の発展を祈念して乾杯、会場では、郷土大学での宮本先生の講義を収録したビデオ、ハミリカメラの上映や先生の記念の写真集や先生の講義録の披露が行われました。

先生の教訓と思い出

参加者は、先生の指導のもとで繰り広げられた民俗資料の収集作業や郷土大学設立当時の思い出。

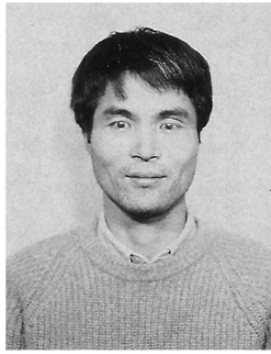


▲参加者の皆さんのそれぞれの思いが
つづられた寄せ書き。先生を偲ぶ思
いが伝わってきます。

失敗したとき先生の心温まるゲンコツをもらったこと。先生が亡くなられて油田中学校と東和中学校で二回にわたり開催された郷土大学祭の準備やそのときのエピソードなど。先生との貴重な教えや思い出を語り合いながら話に花を咲かせ、会は厳かな中にも盛大な盛り上がりを見せていました。
三・三・七拍子で会閉じた後も、「来年も是非ともこの会を盛り上げ、先生が授けてくださった教えを糧に、東和町のためにみんなで頑張っていこう……」と口々に誓いあっていました。

十六年目の教え

愛知大学助教授 印南 敏秀



昨年から民俗調査で、再び東和町にお邪魔するようになった。宮本常一先生から、東和町の石造文化財を調べてみないかといわれ、初めて伊保田の港に着いたのが昭和五十二年の春であった。昭和六十一年に町誌各論編「石造物」をまとめたあと、一時御無沙汰した時期もあったが、東和町とおつきあいもすでに十六年目を迎えようとしている。

今回の調査は信仰を中心とするが、東和町の生活文化を時間と空間の観点から総合的にとらえるというのが最終的な目標である。生

活時間は流れとして歴史的にとらえられると同時に、繰り返し循環する時間としてとらえることもできる。生活時間は、一日、季節、一年、一生、などを目安に区切って考えることができる。東和町の人々は、巡りくる時間を仕事と休息、信仰と娯楽などを組合せ、家族や親族、地域社会の人々と共により良く過ごそうと努めてきた。

前者の生活の変化の意味を考えることも重要であるが、後者もまた重要なことなのである。

たとえば、石風呂はお年寄りがこころまちにした楽しみであり、農作業が本格的に始まる前の春先に焚かれていた。東和町では麦と芋と米が生産の中心で、麦かりのあとすぐ田植えや芋の苗植えで、五月から梅雨まで忙しい日々が続いた。農業は気候に合わせなければ十分に収穫をあげることができず、いくら忙しいからといっても作物は待ってくれない。

家ごとの耕地面積の格差は比較的少ないが、耕地自体が全体に乏しく、生活の安定をはかるには耕地の有効利用が不可欠である。その耕地も島特有の階段状で山まで続き、人々に過酷な労働を強いていた。経営も零細ゆえに家族労働が中心で、年寄りだからといって休むことも許されなかったのである。年寄りには長年酷使してきた体を厳しい作業に備えて整え、心身共に備えることが必要であった。そのために利用されたのが、石風呂であったのである。

石風呂は娯楽の少ない島の年寄りにとって楽しみに待たれる年中行事の一つであったことに間違いはない。さらに、日常生活に視点を置いてみると、島の厳しい風土の中で生産の担い手として死ぬまで働くことを選び、一人の人間として生き抜くために必要な生活技術でもあったのである。

さて、今回久しぶりに東和町を巡り、海辺の道が広く立派になっているのに驚かされた。以前と比べて集落間が短く感じられたほどで、島の生活がより便利で住みやすくなったことが実感できた。ただその反面では、島の人々と海との距離が以前にも増して遠くなったのではないかと危惧をいだいた。

石風呂は海辺や海を見通せる高台の場所を選んで作られている。石風呂を焚くのに必要な藻や海水を得やすいからであるが、私には東和町の人々は海と隔絶した場所では安心できなかったのではないかと思うのである。

海と農業との関わりで藻は肥料になり、浜辺は作物の干し場となった。広場として漁をはじめ様々な相談ごとと浜辺で行われ、社会的にも重要な役割を果たした。イノコや祭などで、潮水は体をきよめ、浜は神と人々が喜び集う祭場となった。亡くなった近親者の霊を送る悲しみの場所となったのも浜辺であった。

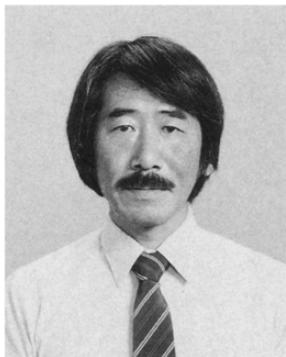
東和町の人々は常に海とかかわり、海から経済的、社会的恩恵を受け続けてきた。海を眺めくらすのが、島の人々の生活だったのである。

いや、海だけでなく、山や生き活を取り巻く植物や生物にも、常に生活者としての観察の目と愛情の目がそそがれていたのである。

東和町の生活文化を考えるには人と、ものとともに、海や山の自然をも視野に入れなければならぬ。再び調査の機会がめぐってきた私に、宮本常一先生は「東和町誌」の中でそう教えてくれているのである。

宮本常一は 生きているか

森本研究所所長 森 本 孝



先生と旅

ささやかな思い出から話そう。
昭和五十二年八月、私は琵琶湖の東に連なる山間の村、高島郡朽木村を歩いていた。そこを宮本先生に見えていただくことになり、三

日間ほどご案内申し上げた。

福井県と滋賀県の県境にある小さな集落で、村民の半分以上が村を離れた過疎地であった。

この時、宮本先生は、荒れ、草のはびこった水田をしばし眺めておられたが、だれに言うともなく、「水田の跡に四季の花を栽培してみたらどうだろうか。」

幸い、ここは、大津、敦賀、京都といった都市に近い。やや遠い大阪でも車で四時間でいける。花を育て現金収入の道ができると、村を去る人も少なくなるのではないだろうか。

それに素晴らしい花園が育つと家族連れで訪れる人も出て来て、活気が出てくるのではないだろうか。

何よりも花に囲まれて暮らすことで、村人の心も温かくなる。生きる気力も生まれてくるのではないだろうか。

かいつまんで言うと、このような事がつぶやかれた。

この時、私は宮本先生を旅に駆り立ててきたもの、民俗学という学問への姿勢、思想の一端に触れた気がした。

私が宮本先生を初めて知ったのは、「日本の離島」という書物を通してであった。当時、鹿児島か

ら南の島々へ旅だとうとしていた私が、大学の生協で見つけた本であった。

そして偶然ながら、後年、旧日本観光文化研究所でその宮本先生に出会った。

以来約十年、宮本先生は風来坊の私をその研究所の若い仲間の一人として遇してくれた。弟子と師という関係ではなく、近き志を持つて、同様な道を歩む仲間として。

しかし私は、素直な学問の徒ではなかった。それは今も変わっていない。素直に宮本先生に教えを乞うのも怠ってきた。私は研究所発行の月刊誌「あるくみるきく」編集長をされていた子息の千春氏に、より多くを学んできた。

だが、その千春氏を通して、宮本先生をごく身近に感じていた。私の心に映る宮本先生は、回國遊行の僧、一遍上人のようだった。

その生きる姿勢や思想に共通するものを感じ、感動し共鳴した。及ばずながら日本の庶民の海の世界を歩いてみよう。ぐうたらな私が宮本先生や千春氏の勧めで不思議にそんな気になり、私の今日に続く歩みが始まったのだった。

宮本先生が世を去ってから既に十余年がすぎた。研究所も既にない。私もかつての仲間もすでにそれぞれの道を歩んでいる。

だがその道は、果たして共に学び、共に目指した道と同じであるかどうか。少なくとも、私に關していえば、次のように強く自問しなければならない。

魂は生きているか

「宮本常一はまだ生きているか」東和町では宮本常一記念事業が始まり、宮本常一記念館を計画中であるという。喜んでいいのかどうかは、まだわからない。記念館はどのようなあるべきなのか。その事がこれから厳しく問われよう。魂の抜けた記念館なら建てないほうがいい。それは記念事業に係わる人々なら、既に固く肝に銘じているはずである。

記念館の中の宮本常一は、庶民の生き方に尊敬を覚え、共感し、庶民と共に生き、その話をよく聞き、また、語りかけ、励まし、生きる勇気を与え続けた、その人であればならないし、そうあって欲しいと、私は強く願っている。

のこりゐて むかしを今と

かたるべき こころのはてを

しる人ぞなき

(一遍上人語録より)

宮本民俗学の伝播

放送教育開発センター
研究開発部助教授

須藤 護

昨年（平成三年）は放送大学の授業番組の制作に追われた一年でした。放送大学はテレビやラジオをとおして、自宅で授業が受けられるシステムの大学で、現在は関東地方を中心に山梨県、長野県の一部で放送が行われています。

平成三年度で開校後十年経過し、数年後には、全国放送ができるように準備を進めている段階です。

今回の授業番組は、「日本人の生活と文化」というタイトルで、景観、住まい、民具、奉納物など、有形のものに焦点を当てて、私たちの先人が日々の生産活動の中で積み上げてきた技術や知恵を追っていく、というものでした。

もちろん私一人ではとてもできるものではありませんので、なるべく多くの旧観文研のメンバーに登場していただきました。番組は

一本が四十五分で、一クールが十五本で成っており、協力をお願いした人を順に追っていくと、
第三回「狩猟と農耕」田口洋美さん
第五回「農耕具の改良と普及」朝岡康二さん

第七回「景観と漁村の暮らし」森本孝さん
第八回「磯の恵み」森本孝さん
第九回「景観と町の暮らし」谷沢明さん

第十回「日本の町と市」岩井宏実さん
第十三回「暮らしの中の信仰」印南敏秀さん

第十四回「手仕事の伝承」田村善次郎さん
第十五回「景観に学ぶ」森本孝さん・田口洋美さん

ということになりました。

このほかに、賀曾利隆さんや香月洋一郎さんなどの成果もお借りしています。また、昨春秋には、「景観と漁村の暮らし」のロケーションのために、久しぶりに沖家を訪れて、木村新之助ご夫妻、新山さんご一家をはじめ多くの人に再開し、長崎では宮本先生の奥さんとともに先生のお墓参りができました。たいへん嬉しく思いました。

さて、この番組では観文研時代につちかってきた成果を、その一部ではありますが、より具体的に示し、学生の皆さん方にいろいろな地方にかけて欲しいというねらいがありました。そして「あるく・みる・きく」を基本においた宮本民俗学の重要性を、できるだけ多くの人に共に経験して欲しいと考えています。

また、放送大学では、「地域社会学」「地域と生活」「芸能と社会」「民俗学」「文化人類学」「近代日本の生活と社会」など、人文系の番組があり、いずれもそうそうたる先生方が講義をしています。

そのような中で、観文研流の問題の切り口やものの見方、考え方がどの程度通用するか、武者修行にでた気持ちで開講を待っています。

私にとって武蔵野美大を経て、観文研時代に得た経験は、実に大きなものでした。それは観文研とは異なった組織に入り、ともすれば目標を失いがちになりますが、がむしやらに歩いてきた時代が、確実に現在を支えていることを強く感じます。これからも極力時間を見つけて歩きます。



▶ 民俗史料館に展示されている養蚕の道具

郷土の歴史とは何か

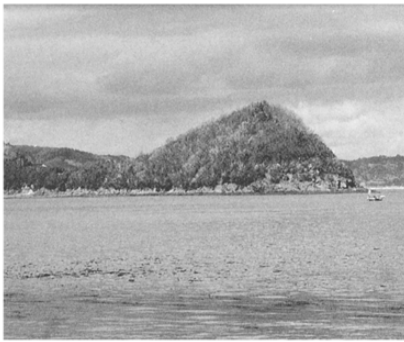
第一回郷土大学講義より

昭和五十五年三月を皮切りに八回におよぶ、宮本常一先生の郷土大学講義が行われました。その後、宮本先生と深いゆかりのあった、山崎禅雄先生編集の講義録が完成しました。その中から、特に貴重な先生のことを紹介します。

シーボルトの牛ヶ首上陸

シーボルトというのはドイツ人であったが、オランダの医師として長崎へ来て塾を開き、多くの日本人を養成したほか、日本の動植物から地理にいたるまで、あらゆる研究をしております。そのシーボルトのながれをくんでこの大島郡から青木周弼が出ています。その青木周弼が大村益次郎を見つけたことになるのです。

シーボルトは長崎から江戸へ行く途中、大島の牛が首へ上陸しまして牛が首で植物採集をしているのです。シーボルトにとって牛が首は、植物採集地として大変興味



▲シーボルトが上陸したとされる牛ヶ首

のあったところだったようで、沖家室の島もスケッチしておるのです。非常に正確に書いてあります。明治十年、モースは、当時、汽車に乗って走っていく途中、レールの両側が真っ白になっているのを目をつけた。よく見るとどうも貝殻らしい。そこで貝塚の発掘になるのです。

「学問で一番大事なことは、発見なのです」

なぜ、貝殻がそんなに散らばっておるのか、それはそこで必ず貝を食べて殻を捨てた人がある。それが積もって塚になっていた。

「私は皆さん方をお願いしたいことは、そういう何にでも疑問を持ってその中から真理を発見して頂きたいと思うのです」

遺跡の発掘

奈良平野のまん中に唐古という池があるので、発掘をやっていくうちに皆びっくりしたことは、住居跡が出てきたほか、稲や稲をくくった束や弥生式土器も出てきた。そうすると弥生式土器をともしなった文化というのは、稲作をともしなった文化であったということが証明された。

それから一、二年後、昭和十七年静岡市の南の方で同じ土器が出てきた。それが登呂の遺跡なのである。この遺跡の場合、田んぼが出てきた。高倉も出てくる。その遺跡の調査で、千八百年位前に富士の裾野のあたりで稲が作られていたことが分かった。しかも、田んぼの一枚の広さが一反ある。そうしますと、班田収授の法が今から千三百年ほど前に施かれるようになるのですが、その時作られた田んぼがやっぱり一反ですから、とつぜん一枚一反の田んぼが作られたのではなく、それより五百年前に田んぼ一枚の広さを一反にしておったということがわかる。

米と統一国家

田んぼの遺跡を調べていてそれが二千二百年前のものであることがわかった。どうしてこの遺跡が二千二百年前のものであるということがわかるのかというと、有機物質は灰素をもっていて、それを測定し調べると年代がわかるのです。そうすると日本で稲作がおこったのは、今から二千二百年前位だということが考えられる。

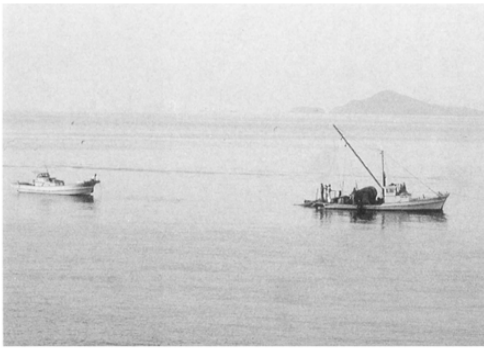
今までほうほう調べて、それに米がともなっている。今我々が作っている米、丸みをおびている米と同じ型なのです。これが二千二百年前の米粒です。

米がつくられるようになることで統一国家、つまり日本が出来上がる。縄文時代には、国というもののがなかった。同じものを作る農耕社会ができることによって、統一国家というものが出てくる。

「このように一つ一つ発見していく」それをつないでいくうちに、日本という国がどのようにに発達したかわかってくる。

学問と推理小説

歴史というのは我々がその気になって発掘していきますと、出てくるものなのです。けっして考古



▲東和町沿岸でのいわし網漁

学だけのものではないのではないのか。我々が目を開いてみていきますと、そういうものが無数にありはしないか。それを見つけていくことだ。

「学問というものは、すべて発見だと思っています。発見が重なっていくことによって、おのずから全体の姿が見えてくるものです」

瀬戸内海に住んでおった人々は、どんな魚を食べておったのか。瀬戸内海沿岸の縄文遺跡を見てみますと、そこから出てくる物の中に、網につける錘が多いです。網の錘に石をもつていてですね、傷を付けて縄がくくられておるのです。あるいは、土器のかけらを両方切っただけで、そこへ縄が巻き付

けられています。そうすると、取った魚はそんなに大きいものではなかったということがわかります。

それが東日本に行きますと、鹿の骨とか、鯨の歯が出てきます。ああいうものを獲って作った釣針が多くなるわけです。従って、釣針が非常に大きいわけですね。そういう大きな釣針を使って獲る物になると、鰯であるとか、ブリであるとか、大きな魚に限られてくるわけですね。

つまり、漁の道具を比べるだけでわかってくるわけでしょう。

「学問の面白さは、それなのです。丁度、推理小説を読むのと同じで、推理小説を読む目をもつてつづこんでゆきますと、いろんなことがわかってきます」

一色の性格を破れ

ところで、縄文文化系の土器は、まだ大島郡から見つかっておりません。おそらくは、米を作るようになった段階で人が住むようになったとみていいでしょう。そうしますと、大体千八百年ぐらい前にここに人が住むようになった。しかし、まだ弥生式土器が東部の方から発見されていないということは、実は我々の目がなまり目だということになるのではなからうか

とそう思うのです。

今、民具を皆さん方は、非常に本気になって整理しています。あれだけ集めてみると、東和町という町の性格が実ははっきり出てくるわけです。驚くほどはっきりできています。

そのはつきりできておるのが、今の我々の日常生活にそのままたがっているからびっくりするわけです。集めるまではわからなかった。集めてみまして、例えば短床鋤はでてくるのですが、長床式の二段鋤なんてのはでてこないのです。そこでピタッと止まっているのです。

みんなワツとそこへゆく、その以前のもない、それだけなんです。古いものはみんなこわして、それ一色なんです。「一色になるような性格を、誰かそれを乗りこえて新しいものをつくる」というのは、なかなか容易に生まれません。それをこれから破らなくては、いい町はつくれないんだという感じが私はするのです」そして、その破るもの、それは実はやはりこういう考古学という学問の目で見た世界がそうなんです。

今日は、ものを見て行くということはどういうことなのか、考古学をとおしてお話しました。

編集後記

宮本常一記念事業会報「郷土」第二号をお届けします。

昭和五十五年当時、宮本先生の郷土大学の講義が、同年三十二十五日の開校式をかわきりに始まりましたが、当初三十回予定されていた講義も、先生のあまりにも早過ぎた無念の他界により八回で途絶えてしまいました。

しかし、先生の貴重なことばや教えを授かった講義を保存するため、宮本先生と深いゆかりのあった山崎禅雄先生に編集をお願いし「郷土の歴史とは何か」という講義録の本を作成することができました。

その中の一節に「学問というのは、すべて発見だと思っています。発見が重なっていくことによって、おのずから全体の姿が見えてくるものです……」

また「何にでも疑問を持ってその中から真理を発見していただきたい……」等々とあります。

編集委員一同、その先生の貴重なことばと教えを糧に今後一層頑張っていきたいと思っています。

ご意見、ご要望等ございましたら、ご一報願います。